

平成30年度

教職員サマーセミナー実施報告書

豊かな発想を地域に、新たな知を世界へ 宇都宮大学

平成31年1月

宇都宮大学教職センター

栃木県総合教育センター

はじめに

宇都宮大学教職センターと栃木県総合教育センターの共催となって3年目になりますが、今年度は昨年比33%減の申込者(407人)、23%減の受講者(360人)でした。栃木県の研修体系が変わり、サマーセミナーの位置づけが変わったことが最大の要因だと思いますが、現場の先生方が夏季の研修も受けにくいほど忙しいのかという不安もあります。

講座の内容についてですが、アンケートによると、今年も受講者の98%が満足(とても満足+やや満足)と回答しており、このセミナーの意義を認めていただいていると喜んでおります。

今年度初めて、教職大学院の正規の授業にサマーセミナーの一般受講者に入っただき、共に学ぶ機会とする講座を2つ開きました。教職大学院には、地域の教育界と連携して教職員の資質向上に努める役割がありますが、それを実体化した試みです。

私たち大学教員には、学校現場や現職教員へのこれまで以上に深い理解と、現場との協働による課題の把握と解決への努力が必要です。大学と教育委員会(総合教育センター)が共催するこのサマーセミナーのような研修機会は、私たち講師を育てる機会でもあるのです。今後も、自らも真摯に「学び続ける教師」となる努力を続けてまいります。

予算面では、共催ということで、事業費の約半額を栃木県に負担していただいております。厳しい財政状況の中、大学と地域教育界との連携の意義についてご理解をいただきました関係各位に、深く感謝申し上げます。(なお教職大学院とのコラボの2講座に関しては、正規の授業と同時開催ですので事業予算は配分しておりません。)

栃木県教育委員会、栃木県総合教育センターをはじめ、皆様のより一層のご指導・ご鞭撻をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、予算等の事情で、この報告書は冊子体での刊行をやめ、Web上のみでの公開としております。ご理解いただければ幸いです。

平成31年1月

宇都宮大学教職センター副センター長(地域連携部門長)

松本 敏

目 次

【 1 】	講座名：特別支援教育における ICF 支援シート活用	1
	講 師：池本 喜代正	
【 2 】	講座名：教師も楽しむ理科実験	2
	講 師：南 伸昌	
【 3 】	講座名：高校のアクティブ・ラーニング実践報告	3
	講 師：皆川 純男	
【 4 】	講座名：発達障害児へのアセスメントと個別支援	4
	講 師：原田 浩司	
【 5 】	講座名：しみじみとする授業：子ども達がつながる深い学習	5
	講 師：溜池 善裕	
【 6 】	講座名：授業研究の運営と課題	6
	講 師：松本 敏 人見 久城	
【 7 】	講座名：学校改革の実際と課題	7
	講 師：小野瀬 善行	
【 8 】	講座名：発育期における体育・スポーツ指導のあり方	8
	講 師：加藤 謙一	
【 9 】	講座名：「現実の世界」との対話を大切にした算数・数学の授業づくり	9
	講 師：川上 貴	
【 10 】	講座名：障害状況にある子どもを理解するということ —教育的係わり合いからの検討—	10
	講 師：岡澤 慎一	
【 11 】	講座名：体ほぐし 心ほぐし 関係ほぐし（その5）	11
	講 師：茅野 理子	
【 12 】	講座名：教師のためのやさしいプログラミング	12
	講 師：川島 芳昭	
【 13 】	講座名：国語教育の仕事	13
	講 師：飯田 和明	
【 14 】	講座名：「特別の教科 道徳」の授業の教材と発問	14
	講 師：和井内 良樹 上原 秀一	

附1：「平成30年度教職員サマーセミナー」アンケート

附2：「平成30年度教職員サマーセミナー」アンケート集計

【 1 】 講 座 名 : 特別支援教育における ICF 支援シート活用

講 師 : 池本 喜代正

実 施 日 : 平成 3 0 年 7 月 2 3 日 (月)

会 場 : 5 C 2 1 教室

受講者数 : 1 9 名

I. 講義の趣旨

本講座では、特別支援教育に関する国際的動向および国内の動向を踏まえた上で、WHO から 2001 年に出された ICF (国際生活機能分類) による障害観・教育観について理解を深める。そして、個別の指導計画作成に有効な ICF 支援シートの書き方、活用方法について、具体的な例を挙げて、演習を行う。国際生活機能分類 (ICF) の理念を理解して、障害の捉え方や対応方法について多角的に考える視点を育てることを目的としている。

II. 講義内容

第 1 部 ICF に関する解説

この講義においては、障害の概念について参加者に考えてもらい、そのあと WHO の ICIDH の考え方と ICF の考え方について、具体的な例を挙げて説明した。ICF の有効性について理解してもらった。また、ICF のコーディングの仕方や評価点について説明を行った。

第 2 部 ICF 支援シートと特別支援教育

複数の発達障害児の事例を基に、ICF 支援シートをどのように書いていくかを検討した。その支援シートから個別の指導計画作成を行い、目標設定や手立ての方策について議論した。そして、子どものニーズを考えた目標設定のありかた、また獲得すべきスキルを身につけさせるための手立てについて考える機会を与えた。

第 3 部 ICF による事例検討

特別支援学校小学部 4 年生の自閉症児のビデオを視聴し、この子どもの ICF 支援シートの書き方を PP 資料に基づいて説明をした。記入する段階で、参加と活動の違い、書き方などのサジェスションを与えた。

支援シートの活用事例として、受講者がそれぞれ実際に担当している子どもについて ICF 支援シートを書いてもらった。そして、代表の方に例を黒板に書いていただき、それをもとに書き方について学ぶとともに、目標設

定や支援の手立てについてそれぞれ発表してもらった。

この方法は、校内支援委員会で使用できるカンファレンスのやり方であり、学校現場で有効な方法であると考えられる。特に特別支援教育コーディネーターのような役割の人にとっては不可欠なスキルとなる。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

今回の受講者は、特別支援学校教員が 12 名、小学校教員 3 名、中学校教員 2 名、高校教員 2 名であった。受講後のアンケート (回収数 19 通) では、「とても満足」が 15 名 (79%)、「やや満足」3 名 (16%) であり、具体的な感想としては、「具体的な事例を講義内で多く聞くことができ、大変参考になった」「ICF 支援シート、これは個別の指導計画作成にとっても有効であると感じました」、「ICF の活用がわからなかったのが、今回それがよくわかって本当に良かった」、「様々な事例を取り上げていただき、担任する子どもに合った指導を考えるきっかけになりました」などが挙げられていた。事例として検討した 2 ケースを通して、自分の担当する子どもの様子が共通する点多かったようで、目標設定の仕方や手立てなどが参考になったという意見や、個々のニーズから指導方針の立て方、そして指導の流れがわかった等の感想が寄せられた。

ICF について詳しく知らなかった方が少なくなかったが、今回の講習を経験して ICF の考え方の重要性と、学校教育現場においても活用できるものであることを認識していただけたと思われる。受講者の評価は、良好であった。



【 2 】 講 座 名 : 教 師 も 楽 し む 理 科 実 験

講 師 : 南 伸 昌

実 施 日 : 平 成 3 0 年 7 月 2 4 日 (火)

会 場 : 教 育 学 部 理 科 棟 3 階 理 科 教 育 学 学 生 実 験 室

受 講 者 数 : 1 3 名

I. 講義の趣旨

理科を教える教員自身が、まずは理科の不思議さ・楽しさを感じ、身近な現象や素材を扱うことで、理科という学問の位置付けを再認識することをねらいとした。

II. 講義内容

1. [化学] ものの燃え方と空気 9 : 35~10 : 50

(1) 炎の特徴と取扱

ろうソクやアルコールランプ、ガスバーナーの炎の温度を実測し、炎の周りの温度分布を体感した。液体燃料が炎上した場合の対応を演示で示した。

(2) 気体の検出方法の確認

線香の火による酸素、マッチの火による水素の検出が確実なものであるか考え、実験し、結果を検証した。

(3) ものの燃え方に対する窒素の効果

酸素 20% で、残り 80% が窒素、二酸化炭素、アルゴンの 3 種類の気体中でのろうソクの燃焼実験から、燃焼に対する酸素以外の気体の効果を調べ、燃焼と気体の性質との関係を検討した。

(4) 液体、固体の燃え方

気体と液体・固体との燃え方の違いから、ものが燃える条件について検討を行った。

2. [化学] 酸性・アルカリ性 11 : 00~12 : 00

(1) 酸性、アルカリ性とは？

酸・アルカリは水溶液中の物質の安定性を決める性質であり、水は pH7 の溶液であるという視点を与え、「水溶液」の見方の幅を広げた。また、水溶液の pH による二酸化炭素の吸収/放出を演示実験で示し、「物質の安定性を決める性質」についての理解を深めた。

(2) アサガオ指示薬による中和滴定

酸性・アルカリ性で色が変わるのは、着色溶液一般の性質であることを、お茶やジュースを用いて示した。アサガオからアントシアニンを抽出し、高校向けには簡易中和滴定実験、小中向けには身近な水溶液の性質を調べる実験や、いろいろな色の水溶液を作る面白実験として

紹介した。

3. [物理] 像が見えるとは 13 : 00~14 : 30

(1) 像ができるしくみ

結像のしくみを説明し、ピンホールカメラと凸レンズを用いた簡易カメラを工作して凸レンズの効果を確認した。

(2) 物体が浮き上がって見えるしくみ

目による像の認識について模型を用いた実験を行い、半球面鏡などで像が浮かび上がって見えるしくみの理解に繋げた。

4. [物理] 電池、モーター 14 : 40~16 : 00

(1) ボルタ電池のしくみ

ボルタ電池を用いた実験を行い、目で見える電極反応と実際の電気が流れる変化との対応を確認した。

(2) 備長炭電池の活用

備長炭電池を作成し、光電池用モーターや豆電球などを動作させることにより、どの程度の発電能力があるのか調査した。

(3) 超簡単モーターの作成

安価な材料で簡単に作成できるモーターの作成を行い、中学校における教具としての活用方法を提示した。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

受講者の学校種がバラバラであったので、教材によっては段階的な内容構成としたりしたが、参加者には概ね楽しめてもらったようだ。参加者が学校で展開しやすいよう、リサイクル品や 100 均商品を中心に、安価で簡単に準備できる実験道具の提供を行ったことも役立ったようだ。

原理的な面では、若干難しい先生もおられたようだが、隣どうしやグループ内での話し合いの機会を適宜設けることにより、理解が深まったように思う。研修において参加者がアクティブにラーニングできるよう、引き続き工夫を重ねていきたい。

【 3 】 講座名：高校のアクティブ・ラーニング実践報告

講師：皆川 純男

実施日：平成30年7月27日（金）

会場：コミュニティフロア（UUプラザ 2階）

受講者数：36名

I. 講義の趣旨

国語、地歴、数学、理科、英語のアクティブ・ラーニング（以下AL）の実践報告をもとに、その成果と課題について考察し、受講者が今後の授業改善に生かすヒントを見出すこと。

II. 講義内容

1 講義「高校のAL」 9:30～10:30 皆川

- (1) ALが求められる背景及びALの定義を理解する。
- (2) 高校授業の現状と課題について考察し、AL型授業を実施する上での留意事項を確認する。

2 実践報告 10:40～14:10(各教科 30分)

(以下は、報告の概要を記載)

(1) 国語 宇都宮北高 田中育子教諭

教材に興味を持たせるきっかけづくり、黙読とペアでの音読、時間を計り競争させる、どんな発問をするかが重要、友人関係が良好になる、知識の定着にも有効

(2) 地歴 大田原高 片柳剛史教諭

日本史における知識構成型ジグソー法、「メインの問い」（易しすぎても、難しすぎてもダメ）、記述の質も量も向上、生徒の授業参加の満足が高まった

(3) 数学 真岡高 小林浩二教諭

「思考のすべ」（比較、分類、関係付け）を生徒に意識させ、数学を考えさせることで、思考力・判断力・表現力を高める工夫、メタ認知で創造性を高める工夫

(4) 理科 大田原女子高 加藤輝教諭

プレゼンテーション力の育成、論述力の育成(R80)、AL指数（講義とALのハイブリッド型）、最初にゴールを示す、インプットとアウトプットの重要性

(5) 英語 馬頭高 濱野由紀子教諭

クリティカルシンキングの育成、プレゼンテーションや問題作成を用いた授業、リテリング活動を用いた授業、教師の課題設定と指示が大切

3 グループ別協議 14:10～15:00

受講者各自が感想や意見、質問をまとめ、それをもとにグループ内で意見交換した。

4 質疑応答 15:00～16:00

各グループから出された、実践報告に対する感想や意見、質問に対して、報告者からのコメントや応答をした。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

受講者は、中学校教員1名、高校の全日制教員30名、定通教員4名、特支校教員1名、合計36名だった。

グループ別協議と質疑応答では、受講者から様々な意見や質問が出され、活発な話し合いが行われた。

以下、アンケートに書かれた主な記述を紹介する。

- ①他校での取組や様々な手法を学ぶことができた。ここで学んだことを授業に取り入れていきたいと思う。
- ②ALについての実践例や失敗談などを聞くことができ、今、自分が考えていることへの解決への糸口をつかむことができたと思う。来て良かった。
- ③複数の学校の具体的な事例を知ることができたため、参加してよかったと思った。新しい手法（教授法）や、考え方なども知ることができた。
- ④何を考えさせたいかを考えて、どの場面でどんな問いをするのかを単元の中で考えておく必要も感じた。やれるところから取り入れていきたいと思う。
- ⑤様々なALの手法があるということを知ることができたので、ALの実践に十分な準備が必要であることが分かりました。
- ⑥グループワークにおいて、うまく活動できていない理由が、ファシリテーション能力のなさと思っていたのですが、それ以外にもグループの組み方など他の工夫の方法、余地はまだまだあるなあ、と気づかされました。
- ⑦先生方が具体的な内容で発表して下さったお陰で、自分の専門教科とは異なる先生方のお話でしたが、全てに参考になるALの取り組み方がありました。ALに対する意識が大きく変わり、出来る所から始めてみようという気になりました。授業の評価は生徒の顔、反応にでている、という事を常に頭において、今後生徒のためになる授業に取り組みたい。

【 4 】 講 座 名 : 発達障害児へのアセスメントと個別支援

講 師 : 原田 浩司

実 施 日 : 平成30年7月27日 (金)

会 場 : 大学会館 多目的ホール

受講者数 : 58名



I. 講義の趣旨

特別支援教育の理念を正しく理解するとともに、通常学級に在籍する発達障害児へのデータに基づいたアセスメントと教育的な支援について体験を通して理解することができる。

欧米のアセスメントと支援の実際を理解し、日本の特別支援教育の在り方について考えることができる。

II. 講義内容

A. 特別支援教育の課題

日本の学校の現状についての理解と課題について考える。

B. DVD視聴「アメリカ：自閉症の動物学者の証」「イギリスのディスレキシア（読み書き障害）対策」

欧米の実態を理解することで、日本の置かれた問題点について考える。イギリスで行われているディスレキシアに対する教育支援から科学的なデータと専門家の存在の重要性を理解する。

C. 日本で取り組める読み書き障害児へのアセスメント

1. 「MIMのアセスメント」の紹介

- (1) 読みの流暢性の重要性
- (2) 通常の授業の中で活用できる多層指導モデル
- (3) MIMの活用法について体験する。

2. 発達性発達障害：診断・治療のための実践ガイドライン」の紹介

- (1) 信頼できるアセスメントの理論
- (2) 実際の手順について体験的に理解する。

「読み」の苦手な子の発見が遅れると、学習全般の理解が遅れ、結果的に二次障害に陥るケースが増えている。そうした事態を招く前に低学年から実施できる検査方法を活用することが有効である。「読み」を4つの方法で計測し標準からの差を計算する手順を学ぶ。

3. 算数アセスメントの紹介



今年度、大学院で試作した算数アセスメントを実施し、どの学年で計算につまづくのかを簡便な方法でデータ化するソフトを紹介した。これは、小学校だけでなく、中学生にも使えるもので、中学生にも小学校の課題を行うことで小中学校間の基礎学力の定着や早期発見・早期指導にも活用できる。

4. 「マルチメディアDAISY」

教科書を読めない子に対して、音声読み上げソフトを使って教科書の読みを促進できることを実演した。これは、単語や文節読みの苦手な子に対して活用する。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

受講者には小中学校以外にも高校や特別支援学校の教員が熱心に研修し、特別支援教育の関心の高さを痛感した。

具体的なアセスメントの手順や指導例を示したことで、教育現場で活用したいというアンケート結果も多数あった。4年連続のセミナーであるが毎回多くの希望者があり、通常学級におけるアセスメントや支援方法についての研修意欲の広がりが見られた。今後は、特別支援教育の科学的データに基づいた有効な支援についての一層の資質の向上が望まれる。

【 5 】 講 座 名 : し み じ み と す る 授 業 : 子 ど も 達 が つ な が る 深 い 学 習

講 師 : 溜 池 善 裕

実 施 日 : 平 成 3 0 年 7 月 3 0 日 (月)

会 場 : 8 号 館 C 棟 2 階 大 会 議 室

受 講 者 数 : 2 2 名

I. 講義の目的

(1) 「学びに向かう態度」と「人間性の涵養」を教科指導を通してどのように実現するかについて考える。

(2) 「深い学び」に求められる要件を考えることを通して、学習を構想できるようになる。

II. 講義内容

(1) 中学校社会科・公民的分野・私たちと日本国憲法(栃木県・A市・2017年10月1日実施)を授業記録等を参照しながら視聴。その上で、この授業に関連した疑問等を受講者がおたずねをし、講師側で説明をした。

Q. 教師は簡単な確認と板書だけをしているが、本時は何も指導しないのか。A. 毎時間教えるべき内容を教え、それを続けるという学習構造をとっていない。授業とは学習指導であり、その指導が目指すべきは、子ども達がそれぞれに自律的に学習を出来るようになることであり、集団で自律的に学習すること(子ども達だけで授業を進めること)である。1)教科書を使って基本事項を理解すること、2)日本国憲法の本質である「立憲主義」の意義を明らかにしようとして、子ども達の学習が筋がついた学習(一人学習)になること、3)子ども達の一人学習が共同学習との関係において、自律的な共同学習(子ども達だけの話し合い)に向けて見直される必要がある。

Q. 本時は、日本国憲法について教えるべき内容をまとめたりしてないのはなぜか。A. 「まとめ」は学習がそこで止まることを意味している。「学びに向かう」のであるから、その学習を通して子ども達一人ひとりがさらなる問題を発見し、それを解決していこうとすることが重要である。つまり、本時での学習も重要であるが、次にどのような学習を作ろうかとするのが、より重要である。知識・理解については、本時までには押さえられており、子ども達に求められるのは、「知っている」ことではなく、「知っているなら自分はどうか」である。したがって、子どもが、次のどのような学習につなげていくかという、動的な「ふりかえり」が重要なのである。

Q. あまり良いとは思えない言葉を使っている生徒につ

いて、なぜ教師の出がないのか。A. 当該の生徒は、この授業で初めて発言をした生徒である。表面的には良いとは思えない言葉を使っているが、実体験に根ざし、またその学級でのその子の位置の来歴に由来する言葉であることを大切にするとともに、それを聴いている仲間も、この子の本時での意外な出を仲間として受け止めている。

(2) 学習の成立と深化(講義)

1) 学習は、子どもの思考を「具体的」「矛盾を足場とする思考」「構造的把握」へと向かわせる。2) 「深い学び」「人間性の涵養」は、人間にとって最もむずかしい、自分以外の他者(友だち)の尊厳(自即他)にかかるものである。3) そこに向け、子ども達を育てるには、1)を共同学習(子ども達による自律的な学習)との関係で位置づける学習構造が求められる。4) それは必然的に従来型の「授業」を変えることを求めると考えられる。

(3) B附属小・1年・ほけんしつ(2018年7月21日実施)動画を授業記録を参照しながら見たあと、この学習を始めた6月6日から、本時の直前の7月12日までの、指導者によって選択的に参照された、子ども達の一人学習の作文を読んだ。子どもの学習と発言との関係等について考察したことを30分間、全員が順番に「つなげながら」発表した。個人の自律的な学習があり、一つの考えがあったとしても、それをただ言えればいいだけではないのが、共同学習である。共同学習では、1)全体の話の流れをつかむ、2)仲間の発言の関係をうまく使って共同学習が深まるような発言をする(分節に留意する)、3)仲間のどんな考えも尊重する、ことが求められる。30分の話し合いでは、このことを経験することで、「深い学び」に必要な共同学習の位置づけについて学習した。

III. 総括

義務教育段階での、ペアやグループは、児童・生徒の学習を捉えることを困難にしたり、全体の中で言える仲間の本音を知る機会が失われるなどの問題があるが、それについては十分触れることが出来なかった。

(とても満足16、やや満足3、マークなし2)

【 6 】講 座 名 : 授業研究の運営と課題

講 師 : 松本 敏・人見 久城

実 施 日 : 平成30年8月2日 (木)

会 場 : 教職大学院教室(6号館B棟1階)・ティーチングコモンズ(7号館1階)

受講者数 : 13名+教職大学院1年次生16名

I. 講義の趣旨

今年度初めて試みた「教職大学院の授業」と「教職員サマーセミナー」のコラボレーションの1つである。教職大学院前期の授業「授業研究の運営と課題」15コマの内、4コマを一般の教職員(経験年数5年以上)と共に学ぶことにより、教職大学院生にとっては広い視野で授業研究の運営上の課題を知ること、一般参加者にとっては、教職大学院での学びを体験し、授業研究の在り方について認識を深めることにつなげることを目的とした。

II. 講義内容

1. 講義

教員養成・教師教育の歴史から教職大学院という制度の意義と役割を確認し、これからの「学び続ける教員」の在り方について考える。

2. ディスカッション 1

院生と一般参加者を混合したグループで、教職大学院での学びなどを話題に、ディスカッションを行う。

3. 講義

授業ビデオの撮り方、授業記録の取り方(児童生徒の動きを中心に時刻と事実を付箋紙にメモすること、解釈は後で議論の中ですので書かなくて良いこと、など)、授業研究会の進め方を確認する。

(昼食)

4. 授業ビデオの視聴

2つの教室に分かれ、小学校算数または中学校理科のビデオを視聴する。付箋紙に観察したことを記録する。

小学校のほうは6年算数「分数で割る割り算」のビデオである。小学校算数の中でもつまずく子の多い単元であるが、グループ学習によって多様な考え方を示して検討した授業の記録である。

中学校のほうは1年理科「気体の性質」の発展的なまとめをする授業のビデオである。謎の気体Xが、まだ学習していない素素であることを、これまでの学習を活用して突き止める授業の記録である。こちらもグループ学習によって生徒の多様な気づきがあるようすが記録されている。

5. 授業研究会

ワークショップ形式の授業研究会を行う。

時間を大まかに記した模造紙に付箋を貼りながら各々の

観察を発表していく。子どもの様子、授業展開の工夫、などについて話題を焦点化しながら話し合い、図としてまとめていく。班ごとにまとめたものを全体で発表する。

6. ディスカッション 2

参加者のそれぞれの学校でどのような授業研究の問題を抱えているかを報告し、その克服に向けて意見交換する。

7. アンケート記入

III. 講座の自己評価と受講者のようす

教職大学院という制度の意義と役割の講義は、教職大学院生にはこれまでの学びの整理となったが、一般の受講者には煩雑だったかもしれない。

教職大学院生(1年次生全員と2年次生1人)と、一般の教員が共に学ぶという試みとしては、互いに刺激を受け合ったという記述が多く見られたので、一定の成果はあったと思われる。

教職大学院生は、前期の授業を通して授業の見方、特に児童生徒の様子を観察する訓練を積んでいるので、子どもの声が錯綜するグループ学習の場面が多い授業でも20枚から30枚の付箋を書いたが、一般の参加者の中にはそこまで観察することが難しかった方もいて、教師の言動は記録できるが、子どもの様子の具体的な見取り方について課題を感じた受講者も多かったようである。習熟の必要性を実感していただけたと思う。

サマーセミナーとしてのアンケートとは別に、院生も含めて「教職大学院の授業とサマーセミナーを共同で開催したこと」についてのアンケートを取ったが、全体として肯定的な回答がほとんどであった。教職大学院生にとっては、4ヶ月間の学びを振り返り、それを外部の方に分かるように説明する活動に意義があったという回答が多く、一般受講者にとっては、教職大学院での学びの様子を垣間見られたことが良かったという感想や、視野が広がったという感想が多かった。

来年も開講してほしいとか、教職大学院とのコラボ講座数を増やしてほしいという意見もいくつかあったので、工夫を凝らして準備を進めたい。

【松本敏・人見久城】

【 7 】 講 座 名 : 学校改革の実際と課題

講 師 : 小野瀬 善行

実 施 日 : 平成30年8月3日 (金)

会 場 : 教育学部 6号館B棟1階 (教職大学院棟1階)

受講者数 : 28名 (受講生12名および教職大学院生16名)

I. 講義の趣旨

学校教育に対する社会的要求の高まりとともに、学校は組織的な学習、個々の教師のエンパワメントがますます求められている。これらの充実には日々の教育実践をよりよいものにするためにも必須といえる。自らの経験や実践をふりかえりながら「学校づくり」のためにどのような理論が唱えられてきたのかを踏まえ、よりよい学校づくりのための複眼的な見方を学ぶ機会を設けることが重要である。そこで本講座では、学校改善のための理論や事例を踏まえ、学校改善のための取り組みについてプレゼンテーションを行うなどの演習を進めた。

II. 講義内容

まず、本講座では、学校教育を取り巻く環境の変化を確認するため、超・少子高齢化やAI (人工知能) の発展といったキーワードを取り上げ、学校教育に求められること、子どもたちに必要とされる力について話し合った (1 講時 : 9:30~11:00)。

次に、これまでの学校モデルが産業化時代の学習観を前提としたものであり、具体的には①子どもは「欠陥品」であり、学校は子どもを「修理」する、②学習は頭の中で起きるもので、身体全体で起きるものではない、③誰もが同じ方法で学ぶ、または学ばねばならない、④学習は教室の中で行われ、世界で行われるものではない、⑤「できる子」と「できない子」がいる、以上のような学習観を超えていくためにどうすればよいか参加者間で議論を深めた (2 講時 : 11:10~12:10)。

そして、新たな学校モデルとして、組織的学習の理論のひとつである、P. センゲの「学習する組織」論を確認し、理論的な要点の理解を深めた。「学習する組織」としての学校のあり方を実現し得るために求められる中核的な学習能力について講義を行った (3 講時 : 13:00~14:10)。

最後に、上記の中核的な学習能力の中でも「システム思考」について講義し、参加者の中で議論を深めた。その上で、本時の講座全体の振り返りを行った (4 講時 : 14:20~15:40)。

III. 講義の自己評価および受講生の感想

受講生は、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教員であり、多様なキャリアを有していた (12名中5名は中堅教諭等資質向上研修として参加)。そのため、学校教育全般にわたる話題を取り上げ、特定の校種に限定した話題提供ができなかったが、受講生からは以下のように概ね好評の評価を得た。大きな理由として、それぞれ校種やキャリアの違いから話し合い活動が活発化したことが挙げられる。話し合い活動をより充実させるための課題設定、理論的な説明の向上を念頭にさらなる改善を図りたい。

また、初めて教職大学院生とともに学ぶ形態であったが、その点も受講生、教職大学院生双方から好評であった。このような講座運営のあり方、共同学習の推進について今後も検討を重ねていきたい。

(受講生の感想)

- ・異校種の先生方や学生の方と、それぞれの立場から意見を聞くことができ、改めて児童生徒に求められる力、本校で取り組む課題が見えてきました。
- ・勤務校の現状を客観的に分析することができ、明日からまた違った意識で取り組みたいと思います。
- ・教職大学院の学びを体感できたため (とても満足)。
- ・学校をはなれた場から、学校がかかえる問題を広い視野で考えられました。



【 8 】 講 座 名 : 発育期における体育・スポーツ指導のあり方

講 師 : 加藤 謙一

実 施 日 : 平成30年8月6日 (月)

会 場 : 5C21教室 及び 第一体育館

受講者数 : 9名

I. 講義の趣旨

近年の子どもの体力低下や教育に関わる問題点をあげながら、就学前から小学校の子どもの体育やスポーツ指導の意義について理解する。そして、実技を通して児童期における体育や運動指導の方法について具体的に学ぶことをねらいとする。

II. 講習内容

講習は講義、教具作成および実技で構成した。講習に先だって受講生の自己紹介(名前、所属および受講理由などを簡単に)を行った。

【講義】

1. 現在の子どもの運動能力について
 - ・体育の日の新聞記事からみた現状について
 - ・現代の子どもの遊びについて
2. 運動発達の概要
 - 1) スキャモンの発育曲線からみた運動発達の特徴
 - ①身長の発育
 - ②骨格の発育
 - ③体重の発育
 - ④筋と筋力の発達
 - ⑤エネルギー代謝と最大酸素摂取量の発達
 - ⑥神経・筋コントロール能力の発達
 - 2) 児童前期(6~8歳)の運動発達
 - ・運動のやり方の洗練化と多様化
 - 3) 児童後期(9~12歳)の運動発達
 - ①身体の調和的発達
 - ②運動の意識的な制御
 - ③即座の習得
 - 4) 思春期前期の運動発達
 - ①PHVA
 - ②思春期不器用
 - 5) 思春期後期の運動発達
 - 6) 発育発達に応じたトレーニングの考え方
 - 7) 運動とパーソナリティの関係
 - 8) 小学生のスポーツ活動のあり方について
3. 運動観察の意義と観察学習の必要性
 - ・VTRの観察による運動の見方
 - ①前転と走運動の動画を取り上げて上手な子とそうでない子の比較
 - ②運動観察のポイント
 - ③運動観察力の重要性
 - ④運動観察を活かした指導と評価
 - ⑤観察学習の意図するもの

【教具作成】

4. 簡単な運動用具の作成(手作りフライングディスク)
厚紙、古新聞、布カラーテープを使って手作りのフライングディスクを作成した。
折り紙鉄砲を作成した。

【実技(簡便に実施できるものを紹介した)】

5. 「多様な動きをつくる運動(遊び)」に関わる運動教材
午前中に作成したフライングディスクを使った運動(準備運動、体づくり運動、各運動領域に関わる事例: 距離、二人組キャッチ、二人組遠投ディスクキャッチなど)を紹介しあった。
6. 運動を教材化する方法(走、跳、投運動の指導)
 - ①スタートダッシュの指導ポイント: スタンディングスタートの指導の仕方
→(キック足の見つけ方、地面を蹴るための適切な膝の角度の見つけ方など)
子どもに一人一人に見合った方法について
→腕振り、スキップ、ギャロップなど
 - ②全力疾走の指導ポイント: 制限走を用いたアドバイスの仕方
 - ③立ち幅跳び、走り幅跳びの指導のポイント
 - ・助走距離や着地動作
 - ④ボーテックスを使った投動作の指導ポイント
 - ・長座姿勢、立ち膝姿勢、サイドステップ投げ
 - ・的当てゲーム
 - ・タオルや紙鉄砲を使った投動作(腕の振り方)のポイント
 - ⑤指導内容と評価の観点について
実技指導のなかで体育における評価の考え方について解説を行った。
7. 総括および受講者の質問への回答など

III 講座の自己評価と受講生の様子

受講生9名は全て午前午後の講習に積極的に取り組んでいた。校種は小学校3名、中学校2名、高等学校2名および特別支援学校2名であった。彼らは、講習内容を実際の授業に役立てたいという意気込みが感じられ、自校の体育学習のヒントを得ることを期待しているようであった。

講習では質問や疑問事項を積極的に出してもらった。そのことから本講座内容への興味・関心が強いことが感じられた。また、午後の実技では館内(38度)の蒸し暑い状況であったにもかかわらず、参加者全員が積極的に実技に取り組んだ。

【 9 】 講 座 名 : 「現実の世界」との対話を大切にした算数・数学の授業づくり

講 師 : 川上 貴, 佐伯 昭彦 (鳴門教育大学大学院), 金児 正史 (鳴門教育大学大学院)

実 施 日 : 平成30年8月6日 (月)

会 場 : コミュニティフロア (UUプラザ 2階)

受講者数 : 20名

I. 講座の趣旨

新学習指導要領算数・数学科では、算数・数学科の学びの過程としての数学的活動の充実が謳われ、「現実の世界」と「数学の世界」を基軸とした「算数・数学の問題発見・解決の過程」が重視されている。その中には、「現実の世界」から出発して「数学の世界」に翻訳して問題を解決し、その結果を「現実の世界」で意味づけたり、活用したりする過程が含まれている。

本講座では、グループによる算数・数学の授業づくりを通じて、「現実の世界」と「数学の世界」の行き来という視点から教科書の題材や発問、指導展開を捉え直すことを目的とした。

II. 講座内容

講座は、参加者を学校種、経験年数をばらけるように4人ずつのグループに分け、グループワークと全体共有を基本とした。以下、講座の内容を一覧にしたものを示す。

≪ 1時限(9:35~11:45) ≫

- ・**ガイダンス(60分)**: 本セミナーの趣旨、「現実の世界」を意識して算数・数学の教科書の問題を捉え直すことについて
- ・**グループワーク①(70分)**: 小学校算数の教科書の教材「およその面積」を現実世界から始まる問題解決の力を育成する点から作り替える

≪ 2時限(13:00~14:40) ≫

- ・**発表と共有①(55分)**: グループで模造紙に板書計画をかき、教材を作り替えた意図と簡単な授業展開の構想を発表し合う
- ・**グループワーク②(45分)**: 中学校数学の教科書の教材「相似の活用」を現実世界から始まる問題解決の力を育成する視点から作り替える

≪ 3時限(14:50~16:00) ≫

- ・**発表と共有②(40分)**: グループで模造紙に板書計画をかき、教材を作り替えた意図と簡単な授業展開の構想を発表し合う
- ・**振り返りとまとめ(30分)**: 作り替えた教材は、「算数・数学の問題発見・解決」の過程のどの部分を追加したのかを振り返る

III. 講座の自己評価と受講者のようす

受講者の構成は、小学校教員(8名)、中学校教員(10名)、高等学校教員(1名)、特別支援学校教員(1名)と多様性に富んでいた。また、経験年数も「1~5年目」(4名)、「6~10年目」(7名)、「11~20年目」(3名)、「21~30年目」(5名)、「31年目以上」(1名)と若手からベテランまでが混ざっている構成であった。それゆえ、学校種と経験年数をバランスよく混ぜたグループワークは、受講者にとっては大変有意義である、活発な話し合いが行われた。



以下、アンケートに書かれた主な記述を紹介する。

- ① 2つの事例についてじっくり考えることができました。異校種の先生と一緒に考えることができ参考になりました。
- ② 校種が異なる題材にも、時間をかけて取り組むことができたから。普段話せない先生方と、1つの題材に時間をかけて話すことができ、良い情報交換をすることができた。自分でもすぐ実践してみたい授業になった。
- ③ 現実的に必然性のない課題や、現実では成り立たない数学の世界の問題を暗黙のままに取り組ませている日常に気づくことができた。目的意識や必然性をもたせる大切さを改めて感じられた。
- ④ 具体物を提示することや、身近なものを用いて「現実の世界」につなげることが深い学びにつながることを学びました。現実と数学の世界がそれぞれ関わりを持って数学の授業につながっていることを学び今後に生かしたいと思います。
- ⑤ 現実世界から課題にアプローチするよさは分かった。現実の世界と数学の世界とのつながりをうまくすることは難しいと感じた。

【10】講座名：障害状況にある子どもを理解するというこゝろ—教育的係わり合いからの検討—
講師：岡澤 慎一
実施日：平成30年8月7日（火）
会場：8A34教室
受講者数：34名

I. 講義の趣旨

本講座では、“障害”の種類や程度に関わらず、障害状況にある子どもを理解する営みとはいかなるものであるかについて検討を重ねる。教育的係わり合いに関する映像資料をふんだんに紹介し、受講者全員でやりとりを重ね、上記の問いへの接近を試みたい。今回は、知的障害事例との教育実践を取り上げる。なお、本講座は、各種検査法や指導プログラム等を紹介するものではない。

II. 講義内容

当日の進行は以下の様であった。

午前（9時30分～12時）

・オリエンテーション／障害状況とは

・“知的障害”に関する理解

・実践事例紹介①：調整の乱れが著しかった重度知的障害事例との教育的係わり合いの経過

・教育的係わり合いの視点について

（昼休み）

午後（13時～16時00分）

・グループ協議

・実践事例紹介②：知的障害・自閉症事例との種々の交渉を重ねた教育的係わり合いの経過

・まとめとアンケート

以下、内容ごとに順を追って簡単に説明する。

まず、障害状況について検討した。ここでは、梅津（1978）の言説を手掛かりに、「ある生体の生命過程において、現におこっている“とまどい”、“つまづき”、“とどこおり”を「障害」ととらえれば、「ふつう“障害者”といわれる人々に現におこっている障害状況、そしてその障害状況に対面相触しているわれわれ自身に、それにどう対処したらよいか、“とまどい”、“つまづき”、“とどこおり”がおこっていると。これも障害状況である。こうした相互障害状況が仕事の出発点、すなわち目標の対象となる」ことを確認した。そして、このことを、当初、“自傷”や“おたけび”が頻発したYさんと筆者との係わり合いの映像資料に基づき検討した。Yさんが抱える困難とそのことがYさんにどの

ような状況をもたらすかを検討し、係わり合いの方針を以下のように仮設した。①“おたけび”や“自傷”を生命活動の調整上の働きを有するものにとらえ、係わり合いの文脈のなかでその意味を見出すよう努め、直接的な対処の対象とはしない、②Yの興味・関心あるいは注意の方向性および焦点をとらえる、③Yの自発した行動が十分な展開を経て終止に至るよう働きかける、④やりとりの活発化を見計らい、係わり手からの活動の提案も打診的に重ねる。こうした方針に基づいた経過について述べるとともにそこから示唆される教育的係わり合いの視点（子どもイニシアチブ・アプローチ、joyful shared event、共創コミュニケーションなど）について言及した。その後、本実践経過に関するグループ協議を行なった。

次に、実践事例紹介②として、知的障害・自閉症事例との種々の交渉を重ねた教育的係わり合いの経過を取り上げた。子どもの“学び”は、日常の生活のなかで、小さな出来事としてたくさんあるものであって、“教科”や“机上の取り組み”あるいは“集団的活動”だけが“学び”ではない。しかしながら、子どもの“意図”や“想い”と教師の“意図”や“想い”との間に距離が生じたり、ときに乖離してしまうことがある。こうしたとき、まずは子どもの目線から“学び”を問い直すことが欠かせないと考えるが、こうした観点から本事例との係わり合いは重ねられ、その経過について紹介した。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

受講生34名の内訳は小学校7名（20.6%）、中学校3名（8.8%）、高校2名（5.9%）、特別支援学校22名（64.7%）であり、多くの人が大変熱心に聴講した。また、34名中19名が2回目以上の受講であったことも特徴の一つであろう。アンケートの結果（「とても満足」が27名、「やや満足」が6名）を見れば、本講座は概ね好評であったといえるが、内容や進行についての課題や意見もあげられ、今後改善していきたい。特に、受講生同士の話し合いをさらに充実させたい。

本講座で今回使用した映像資料のすべてが講師自身の教育実践によるものであり、そのことが講話の内容にも一定程度の説得力を与えているように思われる。今後も自分自身の教育実践研究を推し進め、実践の見識を蓄積し、現場の先生方と対等なパートナーとして語り合えるような研究者を目指していきたい。

【11】講座名：体ほぐし 心ほぐし 関係ほぐし（その5）

講師：茅野 理子

実施日：平成30年8月8日（水）

会場：教育学部第2体育館・8号館E棟4階保健体育測定室

受講者数：13名

I 講座の趣旨

体や心の緊張をほぐすとともに人間関係の緊張をほぐす様々な「遊び」の実践—このシリーズ最後の講座として、新しい内容を含めて、これまでの実践の中から、誰もが楽しく、すぐに実践できる内容を選んで展開を示しながら紹介した。「体ほぐしの運動」やアイスブレイキングなどに応用できる内容であり、①息を合わせること、②気づき、③対話的な学びに重点を置いて実践を行った。

II 講座の内容

以下、内容を抜粋して紹介する（順不同）。

1. 本講座に期待することを含めた1分間の自己紹介

2. 実践内容

実践①：教室でできる遊び

- ゲーパブリズム
- 後出しジャンケン
- 背中では会話

実践②：新聞紙1枚でできる遊びいろいろ

- 肩の高さに持った新聞紙を離す—落とさないで取る
1人で：拍手1回で取る、2回で、何回できるか挑戦
→1回転して取る
2人で：相手の新聞紙を取る→互いの距離を離して
グループで（円で）：隣の人の、1人置き、2人置き
*実践のポイントは、息を合わせること、相手をよく観ること、相手のことを考えて新聞紙を離すこと。
- テーブルクロス引き
2人で→グループで→全員で
*全員での挑戦では、引き手は複数が望ましい、息を合わせる練習をする（写真①）などを話し合い実践。成功の際には拍手が…。
- ペアをさがせ！

実践③：「ロンドン橋落ちた」の発展から…

- 歌遊びでゲーム的に（円で）：橋は1組
- 橋4組—2人組でいろいろな橋をくぐっていく
- 橋の工夫：高さを変える→左右に傾く橋、回る橋、逃げる橋など
* b、c では軽快な曲をBGMに。左右に傾く橋では出

入りのタイミングに気づく（気づかせる）こと、逃げる橋では攻防の面白さに発展。

実践④：旅の記憶（ブラインド・ウォーク）

- 言葉かけによる誘導：向きを変える、止まるなど。
- 体で語り掛ける誘導：体での指示→相手との同調。
*実践毎にどんな感じがしたか、どうしたら良かったかなどを話し合い、それを基に再度実践により確認した。

実践⑤：順番拍手（円でのグループワーク）

- 拍手を送る—受け取る：隣の人に順番に→任意に。
- 〇〇な何かを送る—受け取る（写真②、③）
*以前本講座で実践された方がいて、指示する前に既にbの発展が始まっていた。あちこちで笑いが生じ、受講者の柔軟に対応できる心と体を実感した。

3. 2人組でのマッサージとビデオ鑑賞

III 講座の自己評価と受講者のようす

受講者の校種は、小学校教員2名、中学校教員3名、高等学校教員1名、特別支援学校教員7名であった。校種も年齢も異なる先生方の熱心で意欲的な取り組みにより、毎回のことながら、指導者にとっても、ともに学び合うことのできる有意義な研修となっている。何度か本講座を受講された方には、まったく同じ内容にならないよう、新しい内容や新しい視点を提供できるよう工夫した。

記録的な猛暑が続く中、当日の体調に配慮して、午前中は体育館でやや運動量を多くし（写真①）、午後は空調の効く部屋で軽めの実践を行った（写真②、③）。

積極的に活動し続けられた先生方に改めて感謝したい。今回も、指導者側が先生方からパワーをいただいているのだと実感した研修であった。

「誰もが楽しく、すぐに実践できる内容を選んで紹介」と掲げたが、多くの先生方から現場で使える内容という感想をいただいた。何にも代え難い評価である。

この研修がそれぞれの実践で生きることを願いつつ…。

注) 本講座の内容は、院生や内留生とともに行った教材開発や、全国授業研究グループ並びに各種ボディ・ワークでの講習内容をアレンジし、様々な教育現場等での実践を踏まえて、有効であったものについて紹介した。



①皆で息を合わせて、リーダーの合図で跳ぶ

②見えない何かを送る・受け取る

③重い何か、固い何かを受け取る

【 12 】 講 座 名 : 教師のためのやさしいプログラミング
講 師 : 川島 芳昭
実 施 日 : 平成30年8月9日 (木)
会 場 : 教育学部 8号館F棟 2F 計算機室
受講者数 : 20名

I. 講義の趣旨

小・中・高等学校の学習指導に新たにプログラミングが導入された。しかし、プログラミングの経験を持つ教員は少なく、学習指導の具体的なイメージを持っていないという課題がある。一方、平成30年3月に文科省が公開した「小学校プログラミング教育の手引き（第一版）」では、アンプラグドな指導だけに留まらず、コンピュータを用いて体験的な活動を含めることが求められている。

以上のことを踏まえ、本セミナーでは、プログラミング経験が少ない教員や未経験の教員に対し、初歩的なプログラミングの体験や小・中学校で活用できる教材の紹介などを行い、今後の学習指導に役立ててもらおうことを目指す。

II. 講義の内容

授業の内容と進行は、概ね以下のようであった。

A 午前の講義

- (1) 国が求めるプログラミング教育の位置づけ
- (2) 「Hour of code」を用いたプログラミング体験
- (3) 課題解決の設計演習（アンプラグド）
- (4) 「Scratch」を使ったプログラミング実践
- (5) 「プログル」を使った教科指導例の体験

B 午後の講義

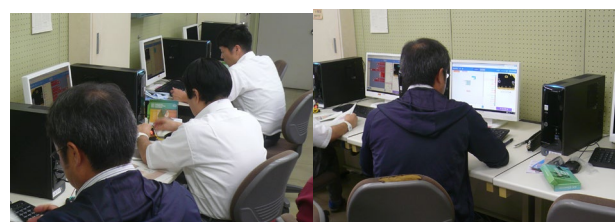
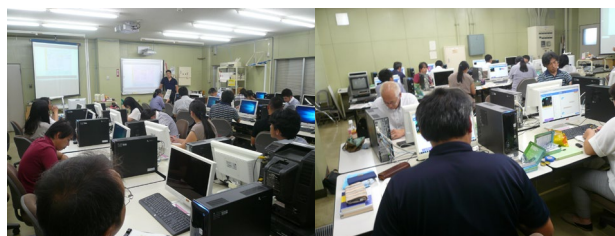
- (1) 「micro bit」を使ったセンサー制御の体験
- (2) LED照明の製作体験
- (3) まとめ

III. 受講者の反応

受講者は小学校13名（午前中のみ受講1名）、中学校1名、高等学校3名、特別支援学校3名の計20名であった。

今回の「教師のためのやさしいプログラミング」の受講者は、基本的にプログラミング経験の少ない又は未経験の教員に向けたものとして実施した。

午前中に行った、「Hour of code」を利用したプログラミング体験では、受講者は与えられた課題の解決のために



設計、入力、実行、改善の過程を繰り返すことで、プログラミングへの理解、効率的な解決手順の設計の大切さについて自分なりの考えを持つことができたようである。その後、「Scratch」を用いて発展的に設計、入力、実行、改善の過程を繰り返し体験することで、プログラミングについての理解が深まっただけでなく、プログラミングへの抵抗感が減り、今後の学習指導への指針を得られたと感じる受講生が多く見られた。

午後は、「micro bit」を活用した制御を中心に行った。基本的な使い方やプログラミングの方法などの体験の後、光センサーを制御したLED照明の工作と制御プログラミング作りなどを行うことで、基本的なセンサー制御を理解できただけでなく、その容易さや発展性などを感じる受講生が多かった。また、プログラミング教育などの必要性を実感できた受講生も多く、自己啓発の機会となったようである。

最後に、セミナー後のアンケートの回答の中でも、当初はプログラミング教育に対して「敷居が高い」、「漠然としていた」などの指導に対する不安を表す言葉が見られたが、今回のセミナーを通して、意識の改善が図れたとともにプログラミング教育に対する見通しを持つことができたなどの意識に改善されていた。このことから、概ねこのセミナーの目的が達成できたものと判断できる。

【13】講座名：国語教育の仕事

講師：飯田 和明

実施日：平成30年8月9日（木）

会場：8号館A棟2階8A21教室

受講者数：12名

I. 講座の趣旨

言葉の教育を考える上での課題を巡って話し合い、考察を進めることの出来る場をつくる。提示する資料、課題と合わせ、参加の方々からも話題、課題をお持ち頂き、国語教育の現状にかかる見方の交流、共有を図り、真正に必要な言葉の教育を模索すべく、互いに視界を広げ、知見を得ることを目指す。現代の社会、その中で教育という視野で、国語教育の仕事を検討したい。

II. 講座の内容

5つの内容により、基本的に受講者の先生方から多く言葉を頂く形で進行していった。

1. はじめに

本講座の概要、目的について講師の方から話をした。少人数構成を活かして、各自の経験や考えから、国語教育の仕事というものを巡って多くの声を聞きたいこと、講師からの講話を聴くということ以上に、受講者の皆さんの声、議論によって本講座を動かしてほしいこと、そのために、課題として伝えていた「真正に求められると考える言葉の教育の在り方」を念頭に置き、現在の状態から発して講座終了後に、新しいものが加わった、変化があったという成果を残してほしい旨を伝えた。

2. 自己紹介～真正に求められると考える言葉の教育

受講者一人一人に自己紹介として、「真正に求められると考える言葉の教育」に関する内容を入れ込む形で話をしてもらった。単なる紹介に止まらず、本講座の課題に照らして自身がどのような見方や考えをもって実践に当たってきたか、それを表して頂くことが向後の議論を進めていく上で必要になる旨を伝え、まず講師から自己紹介を行った。なお、紹介者になるだけでなく、質問者にもなることとし、順を決めて各自一回、質問者として紹介者に対して言葉を投げかけ、応答していくことも実践内容とした。それぞれに講師からの言葉を加えることを含め、休憩をはさんで午前中をこの実践の時間に当てた。

3. 配布資料～グループ討議

講師の用意した複数の資料を昼休み前に配布し、その資料にある内容も参考にしつつ、グループごとに自由に「論題」を定め、それに基づいての討議を行った。用いた資料は、新聞記事やネット配信された以下のものである。

「生活ノート どう活用」

「日本の高校生 依然低い自己肯定感」

「思考がつくる君だけの世界 多和田洋子のベルリン通信」

「PIISAが問う いま必要な学力」

「人間関係の質の低下 孤独の病 助長するSNS」

「家族への思い」

「ありのままの生活 作文に」

4. 全体議論

グループごとの「論題」を基に、全体での議論を行った。各グループで話し合った内容を紹介し、それに関する質問や意見を出し、グループの構成員が応えるという形をとった。本実践は、休憩をはさんで講座終了近くまで行われた。「論題」となったのは、以下の三件であった。

「言葉を発信する力・受信する力」

「コミュニケーション力」

「人とのつながり」

5. おわりに

講師から二つの資料を配布してその紹介をし、アンケートの依頼と本講座を終える話をした。配布資料は次のものである。

「文話 自分の考(一)／綴り方を讀むたのしみ」

「学習者の中に生まれる文学の学び」

III. 受講者の様子と講座の評価

校種等を限定せず開講したが、参加者は特別支援学校1名、小学校9名、中学校1名、高等学校1名であり、1～5年目が3名、6～10年目が2名、11～20年目が3名、21～30年目が3名、31年目以上が1名であった。研修については、中堅教諭等資質向上研修が1名であった。様々な形態で話す活動場面を設けたが、それぞれに有意義な声の交換が行われたと思われる。

評価としては、自ら多くの言葉を発し、また多様な校種の先生から様々な言葉を聞く中で、「言葉の教育とは何か」「国語教育を行う上での心構え」といった根本的なことについてじっくり考えられた点等、受講者の方々の為になることがあったようである。一方で、活動場面によってはテーマを絞り込むとよかったのではないかと、講師からの一定のまとまった講話もほしかった等の指摘があり、今後の参考にしたいと考えるところである。

【14】講座名：「特別の教科 道徳」授業の教材と発問

講師：和井内 良樹 上原 秀一

実施日：平成30年8月16日（木）

会場：5C21教室 教育学部大会議室

受講者数：79名

I. 講義の趣旨

道徳科の授業では、物事を多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習を通して、道徳性を育むことが大切である。実際の授業では、どのような教材を活用し、どのような発問をどのように構成するかが問題となる。そこで、本講義では、実際の教材で発問及び発問構成について受講者同士がグループで協議しながら授業づくりを行うようにした。

II. 講義内容

1. 小学校、中学校における道徳の授業づくりについて

受講者を半数に分け、小学校、中学校における道徳の授業づくりの進め方と指導のポイントについて、配布資料及びプレゼンテーション資料を用いて講義を行った。

まず、道徳科へ移行する道徳授業の特質を踏まえながら、道徳授業づくりの進め方や道徳教材（資料）の活用のポイント、発問のタイプの確かめや発問構成の仕方、効果的な板書の仕方、話し合い活動の工夫やワークシートの活用など授業を盛り上げる多様なアイデアについて事例をもとに確認を行った。

そして、道徳教材「星野君の2るい打」（小学校高学年：信規則の尊重）を用いた実践事例を紹介した。その中で、道徳授業の基本的な展開やそれに対する児童・生徒の発言の受け止め方、児童・生徒一人一人としっかり教師が向き合うことなど道徳授業で大事にしたいポイントについて解説した。

2. 教材を用いたグループワークでの発問づくり

児童・生徒の発達段階に対応した教材（上原：小学校低学年「かぼちゃのつる」高学年「手品師」和井内：小学校高学年及び中学校「泣いた赤おに」）を用いて、各グループに分かれて発問づくりを行った。

小学校3、4年生用の読み物教材「泣いた赤おに」（作者 浜田広介）を読んで発問を考えるグループワークの様子を紹介する。ねらいとする価値は「友情、信頼」である。実際の絵本を活用し作成したスライドを用いて教材提示を行い、教材の概要を伝えた。また、本教材は赤

おにへの自我関与を中心とする主に小学校低、中学年の指導の他、青おにの行動について批判的、分析的に考えさせる指導など、主に小学校高学年、中学校でも活用できる教材であることを紹介した。そして、学習指導案用紙を配布し、グループ毎に指導展開や基本発問について協議するようにした。

協議中は、「主発問をどのように設定したらよいか。」「赤おにの心情のみを問わなければならないのか。」などの疑問の声に、「子供が立ち止まって考えたい場面はどこか。」「多面的・多角的に様々な立場から考えさせることが求められている。」など、適宜アドバイスをを行った。

グループでの協議後、各グループの代表者に発表してもらった。1会場9グループと数が多いので、中心発問とその設定の根拠についてポイントを絞った。小学校のグループでは、青おにの手紙を読んで赤おにが泣く場面や、村人前で赤おにが青おにを殴る場面を取り上げるグループがいくつかあった。また、中学校のグループでは、その後の赤おにの行動について問うという発表も見られた。限られた時間の中で効率的に協議内容を共有することができたと考えられた。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

受講者は79名だった。アンケートを見たところ、受講者には概ね好評だったようだ。グループで協議し発表し合うことで各自の考えがより深まった、道徳教育の今後について見通しがもてた、日頃の指導に生かす具体的な手立てをつかめたなど、研修の成果を見取ることができる。中には、グループ協議の際、小中一緒だったので、座席が分かっていると協議しやすかったとの声もあった。また、道徳科の評価についても研修を深めたいという意見も多く見られた。次年に向けての改善等に前向きに生かしたい。

今年度より小学校では全面実施されており（中学校は次年度実施）、道徳授業づくりや進め方などについて、研修の要望も一層増えることが予想される。受講者の期待に応える内容やプログラムについてさらに検討を進めたい。

<p>平成30年度 教職員サマ－セミナー アンケート</p> <p>教職員サマ－セミナーにご参加をいただき、ありがとうございます。今後の本セミナーの改善に資するため、参加された方々から率直なご意見をいただきたく、以下のアンケートにご協力くださるようよろしくお願いいたします。</p> <p>宇都宮大学 教職センター</p>	<p>● 塗りつぶし例</p> <p>だ円は、鉛筆または黒ボールペンを使い、完全に塗りつぶして下さい。</p>
<p>1. ご自身について教えてください。</p> <p>(1)年齢 ①20歳代 ②30歳代 ③40歳代 ④50歳代 ⑤その他</p> <p>(2)教職経験年数 ①1-5年目 ②6-10年目 ③11-20年目 ④21-30年目 ⑤31年目-</p> <p>(3)勤務学校種 ①小学校 ②中学校 ③高等学校 ④特別支援学校 ⑤その他</p> <p>(4)サマ－セミナーの受講歴 ①初めて ②2回目 ③3回目以上</p>	<p>(2)左記3(1)の理由</p>
<p>2. 本セミナーの開催を最初に知ったきっかけについて教えてください。</p> <p>①勤務している学校等に配布されたポスター・パンフレット</p> <p>②総合教育センターでの研修</p> <p>③総合教育センターや宇都宮大学のホームページ・SNS</p> <p>④同僚、友人、知人の紹介</p> <p>⑤その他</p>	<p>4. その他(広報、研修内容など)についてご意見がありましたら、ご自由にお書きください。</p>
<p>3. 今回受講された講座の内容はいかがでしたか。</p> <p>(1)満足度 ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満</p>	
<p> </p>	

平成30年度 教職員サマーセミナー 実施アンケート（受講者） 集計表

申込者数	407	人
受講者数	360	人
アンケート回答数	352	人
アンケート回収率	97.8	%

1 (1) 年齢

区分	人数	割合(%)	備考
① 20代	61	17.3%	36.5
② 30代	105	29.8%	30.9
③ 40代	120	34.1%	20.2
④ 50代	53	15.1%	11.5
⑤ その他	13	3.7%	0.9
回答無し	0	0.0%	0.0
	352		

1 (2) 教職経験年数

区分	人数	割合(%)
① 1-5年目	69	19.6%
② 6-10年目	96	27.3%
③ 11-20年目	82	23.3%
④ 21-30年目	67	19.0%
⑤ 31年目-	37	10.5%
回答無し	1	0.3%
	352	

1 (3) 現在の勤務学校種

区分	人数	割合(%)	備考
① 小学校	133	37.8%	60.7
② 中学校	79	22.4%	14.1
③ 高等学校	62	17.6%	11.9
④ 特別支援学校	77	21.9%	11.1
⑤ その他	1	0.3%	0.4
回答無し	0	0.0%	1.7
	352		

1 (4) サマーセミナーの受講歴

区分	人数	割合(%)
① 初めて	191	54.3%
② 2回目	79	22.4%
③ 3回目以上	77	21.9%
回答無し	5	1.4%
	352	

2 開講に関する情報の入手方法

区分	人数	割合(%)	備考
① 勤務している学校等に配布されたポスター・パンフレット	206	57.7%	56.4
② 総合教育センターでの研修	91	25.5%	34.8
③ 総合教育センターや宇都宮大学のホームページ・SNS	32	9.0%	4.7
④ 同僚、友人、知人の紹介	19	5.3%	2.3
⑤ その他	9	2.5%	0.2
回答無し	0	0.0%	1.6
	357		

3 (1) 受講満足度

区分	人数	割合(%)	備考
① とても満足	255	72.4%	70.2
② やや満足	90	25.6%	26.5
③ やや不満	4	1.1%	2.4
④ とても不満	0	0.0%	0.2
回答無し	3	0.9%	0.7
	352		

※備考の数値は平成29年度の割合(%)である。

平成 30 年度 教職員サマーセミナー実施報告書
平成 31 年 1 月 発行

宇都宮大学教職センター 〒321-8505 宇都宮市峰町 350

T E L : 028-649-5272

F A X : 028-649-5334

E-mail : kyosyoku@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp